慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	蘇青『結婚十年』における私語り
Sub Title	Self-Narrative in Su Ching's "Ten Years Marriage"
Author	赤羽, 陽子(Akabane, Yoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.25- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

蘇青『結婚十年』における私語り

赤羽　陽子

一

蘇青の『結婚十年』[1]は、一九四四年七月、日本占領下の上海で出版された。発売後数日間で売り切れ、その後も増刷を重ね、四七年には十八版まで刊行されている。もともとは雑誌に連載されたもので、全二十四章のうち第七章までが『風雨談』第一期から第十一期までに計七回掲載された。三か月の中断後、蘇青自身が経営する天地社から単行本として刊行されたものである。

当時、上海は日本占領下にあった。一九四〇年代の中国は、共産党支配下の解放区、国民党支配下の大後方（国統区）、そして日本占領下の淪陥区の三つに大きく分かれていた。一九四一年十二月八日太平洋戦争勃発から一九四五年八月十五日日本降伏までが、上海では淪陥期と称される。上海陥落の後、多くの作家は国統区あるいは解放区へ去り、上海に残った作家も沈黙を守っていた。陥落前には百種以上もあったといわれる文芸雑誌も、一九四一年にはほとんど

停刊に追い込まれ、このため、淪陥期は暗黒の時代、文学の空白の時代とみなされてきた。しかし、占領下にあっても大都市上海には多くの市民が暮らしており、情報として、娯楽として活字を求めていたのである。四二年から四四年にかけて、『古今』『万象十日間』『雑誌』（復刊）『紫羅蘭』『風雨談』『春秋』等の文芸雑誌が相次いで創刊され、四十種を超えるほどであった。厳しい言論統制の下で、出版市場が成立し、文学作品も商品として流通していた。戦争や革命について語ることも読むことも禁じられた都市空間の中で、大状況について語ることのできないがために、かえって政治思想による抑圧を受けずに恋愛や家庭の日常を語ることが可能となり、商品化していったのである。

蘇青は、このような時代の上海にいた。初めて発表した文章は、一九三五年六月の『論語』に掲載された「生男與育女」である。彼女自身によれば、新婚生活の閑つぶしのため、あるいは小遣い欲しさで、投稿し採用されたものである。「産女」という題であったが、編集者によって題を変えられたという。以後、馮和儀の筆名で、林語堂主編の『宇宙風』へ投稿するようになった。『宇宙風』が広州に移ると『宇宙風乙刊』へ投稿、これも停刊となり、『中華週報』『中華日報』に散文を発表していた。これらの散文のテーマは、出産や育児、夫婦や家庭の問題、女子の教育や就職等女にまつわる問題であった。

蘇青は、作家になったいきさつを次のように語っている。

私は失業してしまった。社会にごく小さな場でも求めようするのは、本当に容易でない。いつになったら夫が思い直しもとのようになるのかも分からず、子供たちがお腹をすかし泣いている様子は見るに見かねる、どうすればよいだろう？　私はまた投稿を考えるほかなかった。

この時上海はすでに淪陥区となり、いわゆる正義の文化人はとうに所属する機関や団体にしたがって続々と内地へ行ってしまった。上海には多くの新聞や雑誌があったが、書き手の数がひどく減ってきたので、試しに投稿してみると、当然簡単に採用された。私の投稿の目的は純粋にお金のためだった。友人にちょっとそそのかされたのだが、私のために生活の糧をなんとかするよう考えてくれたわけでその人の好意なのだと分かっていた。ただ、以前は文章の署名には「馮和儀」をいつも使っていたのだが、その時から「蘇青」に改めた。だからといって、なにか悪いことをして地下工作の同志に調査されるのを恐れていたわけではない。当時はそうした組織の名など聞いたこともなかったのは確かだし、まして彼らがいったい地下何階までもぐり込んでいたのかなど知るはずもなかったのだから。とにかく、私はあまり本名を使いたくなかったので、新しいペンネームを使ったのだ。原稿を売るのは短期的な生活手段のつもりで、やがては自分と子供たちを養えるように、きまった仕事と固定収入を得たいと思っていた。

書く文章もますます多くなり、「蘇青」という名前もだんだん人に知られるようになったが、きまった仕事はやはり見つからなかった。そこで、私はすっかりあきらめ職業作家としてやっていくほかなかった。（蘇青「関於我——続『結婚十年』代序」）

蘇青は、職業として作家を選び取ったのである。そして、『結婚十年』を連載し始めたとき、すでに蘇青は名の売れた散文家であった。その散文には、「大胆率直」、「赤裸々に表白」という評語が与えられた。たとえば、女性文学研究者である譚正璧は、「彼女の作品では、いつでも〝赤裸々〟な〝歯に衣きせぬ直言〟を読むことができる。〝性欲〟、〝月

経〟、〝生理的欲求〟…といった類の普通の文学作品ではあまり用いられない言葉も、彼女の筆の下では〝日常茶飯事〟である」と言い、陶淵明が酒を好きだからといって、もし全ての詩に酒という文字を使ったとしたら、単調で味わいがなくなってしまうだろう。四川料理では何にでも辛子を使うので味覚が麻痺してしまう。四川料理の辛子のように、蘇青は刺激的な言葉を使いすぎだと批判している。[2] 当時から現在に至るまで、散文・小説を問わず、蘇青といえば「大胆率直」、「赤裸々に表白する」と評されてきた。[3]

確かに蘇青は、誰でも知っているが口にするのを憚るような言葉を用い、日常生活の空間として客間も寝室も同じように描いている。作品における語彙や場面が、「大胆」「赤裸々」な印象を与えてしまう。しかし、言うまでもなく、どれほど「赤裸々に表白」しようとしても、語る「私」は語られる「私」をまなざし、客体化せざるをえない。そのまなざし方、自己認識のあり方、表現方法にこそ、テクストの時代性と固有性があるのだ。

小稿では、『結婚十年』において「私」がどのように語られているのかを考察し、その「私語り」の特質を明らかにしたい。

二

『結婚十年』は、外国文学を学ぶ十八歳の女子学生である「私」が、地主の長男に嫁ぎ、十年間の家庭生活を描いた長編小説である。その間に、工学部生との恋、初めての出産、子どもが女児であったための屈辱、日本軍による空襲の中で二度目の出産、乳飲み子を抱えての避難、夫の弁護士としての成功、戦争勃発による夫の廃業等があり、夫が「私」の友人を妊娠させ、結核に罹り、ついに離婚に至る。

その冒頭には、罫で囲まれた新聞広告のスタイルで結婚式のお知らせが置かれている。結婚するのは徐正甫の長男徐崇賢と蘇兪淑宜の長女蘇懐青である。そして、「十月十日の記念日の早朝、私たちの結婚の広告が掲載されたとき、まだ夜も明けないのに、部屋の中はもう人で一杯だった。母は昨夜私と床を共にし……」と続く。

譚正璧は、「一人称で書かれているうえ、思想や行動が作者と似ており」、「自叙伝だと思って読む読者が少なからずいる」[4]と言い、張愛玲は、「多くの人が、文学にはもともと興味を覚えずに、『結婚十年』にはきっと性生活の描写がたくさんあるだろう、ちょっと見てみようと買う」が、そういう人は「失望するだろう」[5]と述べている。このような同時代の発言は、テクスト中の作中人物と語り手と作者の同一性を読者が期待し、信じていたことを示している。

作者と作中人物が混同されることについて、蘇青は女性作家座談会[6]において、次のように述べている。

> 魯風　『風雨談』に連載中の『結婚十年』は自伝でしょう。
>
> 蘇青　自伝的小説です。私の実際の生活から取材していますが、フィクションもたくさんあります。
>
> 魯風　私たちは全く小説体の自伝だと思っていました！
>
> 蘇青　女性作家が文章を書くとき、最も困難なのは、書いたことがそのまま彼女自身のことだと推測されやすい点です。もちろん、男性作家でもそうなのですが、ただ女性の方が傷つきやすいものですから、なおさら大胆に描写することができないのです。私自身はこの点をあまり考慮しないため、多くの人にあれこれ言われました。

だが、蘇青がどのように弁明しようとも、一人称で語り出され、しかも作者の名に「懐」の一字を加えた花嫁の名前が冒頭に記されていることからも、これから始まる物語は蘇青自身の自伝であり、その結婚生活の告白なのだという読みのコードを読者に与えている。おそらく、「赤裸々に表白する」蘇青の大胆な告白が読みたいという読者の期待があり、その期待が売れ行きを伸ばしたであろうし、また、生活のため売らねばならぬ蘇青にとっても、読者の期待を引きつけ、自らの体験を素材として書けば売れるという判断があっただろう。

民国二十一年十月十日の婚礼と広告に書き込み、その直後に「昨夜」という現在の語りを指示する時間詞によって、語っている今と語られている過去との時間的距離をゼロにしている。このような時間詞の用法は、ここだけに限らない。基本的には物語の時間的流れに沿って過去の出来事を語りつつ、「昨日」、「今日」、「明日」といった時間詞をしばしば用いている。また、過去の時点における心の動きの描写や直接話法の会話を地の文に流し込むことにより、こうした時間詞を使用することの不自然さを軽減している。語りを過去に貼り付かせることとなり、過去の出来事や心理が現場報告的に語られている。

例を挙げておこう。初夜を描いたものである。

ベッドの上には掛け蒲団、紅い繻子で〝百子図〟の刺繍の大きな蒲団が一枚しかなく、彼はすでにもぐり込んでいた。その夜は枕も一つしかなく、おしどり枕とか言うそうだ。しくじった！　もし私の方が先に入っていたら、この二つの大事なものを先に手にできたのに。今となっては彼が先に占領しちゃったわ。私にどうしろというの？　彼と頭を並べて寝るなんて、出鱈目すぎるわ。（第二章「新婚初夜」）

ここの「しくじった！」のように、発話されない感嘆詞や感嘆句が私の語りにしばしば挿入される。語り手＝作中人物の感情表現であるとともに、過去を「今」として語っている印象を与え、いわば現前の時制ともいうべき効果をもたらしている。アスペクトの助詞「着」の使用により、進行態や状態の継続を表現し、さらに疑問型も多用されており、これらの表現手法が複層的に、今／ここに即した表現をかたちづくっている。

また、過去の出来事は、語る時点から意味づけられはしない。つまり、語る今におけるあるべき「自己」の視点から、「あの時、私はなになにであった」という形での過去形で語られてはいない。成長した「私」が、過去の「私」を反省し、至らなかった過去の「私」を描くのではなく、物語の進行する時点で、常に当事者の一人としての「私」が現在進行形で語っている。このため、「私」の感情や心理は、物語を展開する契機として働かず、時間の進行を推進力とせざるをえない構造となっている。過去の時点に貼り付いた自己をそのまま表現し、反省的視点が介入しないため、率直であるかのような印象を与える。しかし、そのことは語られる「私」が現実の「私」と同一である根拠とはなりえない。理念型としての「私」が欠如し、自己批評的に自己を捉えかえすことがないにすぎない。

語る「私」が語られる「私」を把握し直すかのような、「私」による自己規定がときおり挿入されている。

> 胸には新しい理論で一杯だけど、行動はいつでも旧い思想に支配されている、私はそういう人間だ。恋愛について言えば、絶対に自由であるべきだと思うけれど、行動するとなるとちょっと考えてしまう。女は二夫に仕えずという考えが、お化けの影のように、いつも心を掠めて、……（第四章「愛の渇き」）

だが、これらの自己規定は、行動や心の動きの描写によって自己像が結びえないために挿入されているのであり、自己矛盾を解釈するためのものであったり、読者に対する共感の訴求であったりする。自己規定においても、その時点での「私はなになにの人だから」と説明するにとどまっており、語る「私」が、到達した自己を基準として、過去を説明しているわけではない。

三

蘇懐青の結婚は、母親が探してくれた相手とのものだった。当然のこととして結婚し、婚約者のいない女を見下し、豪華な婚礼や嫁入り道具を自慢する、「女」という制度を疑わない少女であった。だが、婚礼の当日から、屈託のない自慢は揺さぶられる。

嫁ぎ先の親族への挨拶が終わると、女性たちが嫁入り道具をあれこれ品定めする声が耳にはいる。そのうえ、いとこの未亡人瑞仙は、「花嫁の顔はまあまあだけれど、ただ背が低すぎるわね。お兄さんには釣り合わないわ」と、義妹の杏英に話している。花嫁という存在は、人々の視線にさらされ、視られる対象として客体化される。

懐青は、視線自体のもつ権力性そのものに対してではなく、視線の下す評価に拘る。賞賛は受けるべきものであり、軽視や侮蔑は我慢できないのだ。

どんな所でも、もし私より目立つ人がいるのなら、もう行かないわ。私ってね、宇宙の中心にはただ私一人だ

けがいるべきなの！　藍色の空にかすかな星が無数に並んでいるとしたら、私はあのきらりと万里を照らす大きな月でなきゃ。名も知らぬ草花で満ちあふれた彩りゆたかな花園だとしたら、私はすっと高い白蓮の花でなきゃ。池の真ん中でゆらゆらし、あたりに微笑を振りまくの。でも、くっつき合っている他の花と一緒にされたくはないわ。（第一六章「狭量」）

これが、懐青の願望としての自己像であるといえよう。だが、人間は他人との感性的な関わりの中で、自己像を修正せざるをえない。家庭内の日常的な他人との関係であっても、些細な仕打ちやちょっとした一言により、他人との違和感が生じ、自己像を疑い修正し、相手との関わり方を変えたりする。『結婚十年』は、家庭の日常生活の些末な事件で充ちている。

親元を離れ、上海で二人だけの生活を始めたときのことである。引っ越したその日、食事を用意するために、米や炭団を注文したが、炭団が届かない。女中に催促に行かせようとすると、夫は道が分からないだろうと言う。私は、「それならあなたが自分でちょっと行って来て」と言い、彼は、「主婦の仕事だ、僕が代わってするわけにはいかない」と言う。私は腹を立て、何としても動こうとしなかったが、暗くなった頃、店屋が届けに来た。

このエピソードは、単に例としてあげたにすぎず、とりわけ意味があるわけではない。こうした夫婦の諍いが逐一書き込まれている。もちろん、諍いだけでなく夫の優しい言葉もあれば、舅姑小姑との関わりも、女中や友人とのつきあいも、食べ物、着るもの、金をめぐるやりとりなど、さまざまな生活の断片が感性的な事件として記される。些末なことが、些末なままに次から次へと描かれる。だが、蘇青は描写するだけで、分析したり解釈しない。些末さのもつリア

リティに寄りかかり、その集積こそが物語全体のリアリティを支えると信じているかのようだ。

蘇青の視線は、ほとんど日常的な人間関係の外に向けられることがなく、大状況に対しては閉ざされてしまっている。救国救亡のために、私情は否定されねばならないという、時代的な大義には見向きもせず、ただただ日常における違和、不快、確執に拘り、その切片を一枚一枚描写した。大状況は、自己の生存にとって無縁のものとして、意識の外に追いやられる。

雇っている乳母が、自分の子どもを孤児院に入れ、乳母として働きに来たという身の上を話す会話の場面である。

「子どもを手放したんだから、お金をしっかり稼ぐのね」私はありきたりの言葉で慰めたが、心中いささか得意だった。私の赤ちゃんは女の子、それでも乳母を雇えるのに、この人は男の子を孤児院に入れてしまったんだわ！　私は貧富の不平等は、男女の不平等よりずっとひどいことを知った。（第七章「寂しい一月」）

日常に閉じこもろうとしても、大状況の問題は日常の場にも立ち現れてくる。貧富の差に気づき、驚きながらも、共感や同情は呼び起こされず、富裕層に身を置いていることを得意に感じるだけである。従って、社会に開かれた意識は形成されようもない。

四

日常生活の空間に閉ざされていたとはいえ、懐青は同時代の女という制度と妥協しきったわけではない。『結婚十年』は、同時代のあるべき家庭像、あるべき妻の像と自己像を重ねることができず、そのために味わった「私」のつらさ、恨み、口惜しさの物語ともいえる。懐青にとって、自己像の変更を迫る最も深刻な契機は出産であった。懐青は、結婚を妻になることだと思っていたが、豊かな地主の長男の嫁になったのであり、当然ながら男子出産を期待されていた。生まれた子が女だったことが、恨み、口惜しさの源となった。

初めての出産の場面である。

寝返りをうつと、ぱんと音がしてお腹で何かが破裂したようだ、すると熱い水がどっと流れ出た。私はびっくりして、震えがとまらず黄大媽を呼んだ、黄大媽はいけない、胞水が破れちゃったと言う。（中略）

ベッドが整えられ、西洋医は私に横になるように言った。まず下半身を消毒し、消毒し終ると、白い布一枚だけを掛けた、その下は裸だ。戸の外ではくすくすと笑っている人がいる。（中略）今度こそおしまいだ、たとえ助かったとしても、すぐに離婚して母さんと一緒に住んだ方がいいと考えていた。賢はまるで何でもないかのようだ、男はみんないざとなると自分とは無関係みたいに痛みと危険は女だけに押しつけてしまう。（中略）

けれども私はもう痛くて我慢できない。死にたい、はやく死んだ方がましだ！　新しい部屋の調度に目をやった。真新しく、光りかがやいている、とてもたくさんのもの、みんな私のものではなくなってしまう！　お母さ

ん、半年以上も会っていない、もう会えないのかも知れない。「お母さん！」こらえきれず大声で泣き出すと、陣痛がまたやってきた。医者は「頭が見えた」と言った。だが、力を抜くと、子供の頭はまた入ってしまう。

このように一回また一回といきみ、どれほど時間がたったのかも分からなかった。すでに朦朧とし、恐怖や悲哀の気持ちもなくなり、ただ全身が思うにまかせず、どうすればよいのか分からない。痛いのに痛くないようでもあり、便を出したいが出せない、ただ非常に大きな塊が奥に詰まっており、力を込めていきんでも、どうしても出てこない。白いカバーはとうにめくられ、下半身が露わになっていたが、寒いとは感じず、まして恥ずかしいとは思いもしなかった。（中略）

結婚なんて結局何もよいことはない！　ただお腹を一度痛くしただけ、これからはもう一生男の人には関りたくない。（第六章「女児出産」）

出産の過程を、客観的観察と主観的感想を織りまぜ、その時々の感覚や感情、身体の変化、周囲の人の反応など具体的かつ詳細に書き記す。医学的まなざしともいうべき客観化と当事者としての揺れ動く主観が、隠蔽すべきものであった出産を執拗に描写している。

無事出産すると、「大変な危機を抜け出したみたいに、私の心は安らかさで満ちた。全宇宙が澄みわたり」、「私にはもう子どもがいるのよ、私にはとても大切なこどもがいる！」だが、女児誕生と分かると、「部屋中静まり返り」、「心はただ空虚さだけ」を感じ、女客の「先ず花が咲き、次に実を結ぶ」、「来年はきっと弟を産むわ」と話す声が聞こえる。姑は声もかけてくれない。

「私」が、無事出産し幸福感に身を任せようとするその時、出産を見守っていた周囲の人々は落胆し、生まれた子の顔を見ようともしないのである。

生まれる子が男か女かは、産む女の責任ではない。だが、男児を出産すれば大手柄、女の子では次の出産に期待をかけられるだけである。母乳を与えようとしても、舅や姑はすぐに男の子を産むためにと、断乳を命じる。

この先、子供はもう二度と産みたくない、産むときはひどく痛いし、女の子を産めばとてもひどい目に遭うんだもの、と心の中で思った。結婚なんて本当に全くつまらない、二人の心といったら、まだ遥か遠く隔たっているし、男女の快楽といっても一瞬のうちに終わってしまう、十分足らずと引き換えに、十か月もお腹に宿し、十年も苦労して育てなきゃならない。（第七章「寂しい一月」）

これ以後、懐青の性愛は、生殖する性と快楽としての性に分裂し、統合されることはない。周囲が、子孫繁栄のための男児出産を望めば望むほど、生殖する性を忌避しようとする。自らの身体が、子孫繁栄の道具としてあるいは夫の欲望の対象として客体化されることに反撥を覚えながら、自らの快楽は肯定し追求したい。

結婚はつまらないけれど、まじめな女性にとってはとても便利だ。一組の男女が情をなくしてしまっても、一つのベッドで共寝すれば、全く何の関係もないはずはない。（第六章「女児出産」）

だが、生殖機能を切り離し、快楽としての性を自立させるという性の思想に到達したわけではない。引き裂かれた性愛のままに、妻としての暮らしを続け、その後も子を産む。子孫繁栄のためにではなく、「私の子どものため」だと置き換え、そのためには「何だって堪えられる」という、母性神話に回収されていく。

前に理念型としての「私」が欠如していると述べたが、この点で修正が必要となる。自己神話化はないものの、母性神話に重ね合わせる形での神話化がなされている。子どもへの愛、母の讃美は繰り返し語られている。

子どもを持てば誰だってまっとうな人間になる、この世で母親は最も善良なのだから。母になれば、善良も難しくない、その心はこれ以上ないほど汚れなく、子どもさえいればほかのものは何も要らなくなる。（第六章「女児出産」）

女は十人の夫だって惜しげもなく捨てられるけれど、子どもは一人の半分だって捨てられない。あの子たちはみな私のものでなければ、そう、私のもの、私はあの子たちを育てたい、私は育てるわ、そうするわ。（第二十四章「すべて子どものために」）

だが、このテクストにおける「私」は、決して実感としての母性に貫かれているわけではないし、本能的な子どもへの愛に浸っているわけでもない。懐胎への恐れ、生殖する性への忌避もまた繰り返されている。

夫に対してどうすればよいのかしら？　気に入られるようにと思うけれど、子どもができるのは怖い。気に入られなければよいのだと思っても、ほかの人が彼の気を引いたら怖い。彼をそれほど愛してはいないけれど、彼が私以外の人を愛するのは嫌だ。（第九章「私の夫」）

彼が身をすり寄せてくると、私はかえっては声を荒らげ「触らないで」とわめいた。彼は意外そうにびっくりして、しばらくためらい、怒ってものも言わず出て行くしかなかった。私は悲しかった。夫なのに、私の心は分かりっこないのだ。（第九章「私の夫」）

最終章「すべて子どものために」において、母性神話の自己欺瞞的作用が露呈する。夫が生活費を渡さなくなり、そのうえ、女友達から夫の子どもを身籠もったと告白される。夫婦の関係はすでに崩壊していた。離婚を決意するものの、夫は子どもを手放せないと言う。たまたま離婚歴のあるすばらしい女医と出会い、吐血した「私」は彼女の診察を受ける。女医は結核だと診断し、「子どもに母乳を与えないように、子どもと接触しないように」と言う。子どもに感染させないため、「子どものために」離婚し一人で生きていく決意をする。女医に離婚の証人を頼むと、「結核が完治するまで、誰とも再婚できない」と宣告される。ここでは、出産場面とは全く異なり、結核の症状も、病に対する苦痛も苦悩も描かれない。戴錦華編『浮出歴史地表』が正しく指摘しているように、このプロットは大きく破綻している。「テクストは、離婚し家を出ていくための動機を、極めて多量に提供しているのに、蘇青は最後の一章で強引にそれまで提示されていない外在的な災難（結核）を導入し、それを唯一の動機とした」のであり、「本当の意味で〝ノラ〟の

家出となりうるのに、〝子どものために〟母性が偉大な犠牲を払うという昔からある物語[7]にしてしまった。都合よく「私」は結核に罹り、性愛から切り離されてしまい、母性愛に充ちた母として離婚し、清く正しい母の物語として、物語は閉じられる。

五

蘇青は、抗日戦争終了後、祖国を裏切った漢奸だ、猥褻な小説を書いたなど、各種の批判を浴びる。これらの批判に対し、蘇青は「関於我――続『結婚十年』代序」で反論した。

> 当時、私は内地に行こうとは全く思いもしなかった。頼れる友人が内地には一人もいなかったから。もし私が流行を追うように行ったとしても、やはり文を書いて売ることになっただろうし、そのうえ私が書ける文章は社会、人生、家庭、女性、そういったものについてだけで、抗戦意識が入り込んだりしなかっただろう。私が上海で投稿していても大東亜とやらを賞賞したことは一度もないのと同じように。
>
> 確かに私は淪陥期に上海で文を売った。（中略）私が文を売ったか売らないかが問題なのではない。問題は、私が売った文が民国を害したか否かにある。もし国家が私たち淪陥区の人民であっても何とか生きていく権利を否定しないのであれば、米屋が米を売り、人力車夫がどんな客でも乗せるのと同じように、私は文を売って何とか生きてきたのであり、心に恥じることはない。

中華人民共和国が成立した後、蘇青は歴史劇『屈原』の脚本編集の仕事に携わっていた。『司馬遷』に取りかかることとなり、司馬遷の人物像について問い合わせた賈植芳への手紙が証拠とされ、一九五五年、胡風事件に連座し、一年半の獄中生活を送った。以後、親しい人からも世間からも見捨てられ、暮らしていた。一九七五年一月、退職したときの月給は六一元七角だったという。一九八二年一二月、病気により死去、六九歳であった。(8)

蘇青は、コミュニストでもなければ、フェミニストでもない。自己の感覚を信じ、感じたことは事実なのだから、そこには真実も含まれているはずだと信じ、金を払って買ってくれる読者の期待に応えつつ、生活のために書き急いでいた。成長による覚醒もなく、救国と啓蒙の二重奏とは無縁であった。

ただし、私的生活の記述に終始したとはいえ、日本占領下の上海における物価の高騰、家捜しの困難、空襲による爆音の中での出産、上海からの避難行等の描写は、時代の証人たりえている。

主婦の生活空間のなかで、蘇青はひたすら観察し、記述する。主婦としての生きがたさが、解釈抜きに語られ、「結婚なんてつまらない」という声が重奏低音のように響いている。覚醒せず、解釈原理をもたないために、かえって現在の問題と通底することとなり、古びることを免れているともいえよう。

「正しい文学」という強力な抑圧が働かなかった淪陥期の上海であったからこそ、正しさを求めない現前的な語りが可能となったのである。

注

(1) 蘇青『結婚十年正続』(上海書店出版、一九八九年)。『結婚十年正続』は、『結婚十年』十七版(四海出版社、中華民国三十七年三月)及び『統結婚十年』四版(同じく民国三十七年十二月)の影印合本である。この二部作は簡体字で新たに出版された『蘇青文集上』(上海書店出版社、一九九四年六月)にも収録されている。

(2) 譚正璧「当代女作家小説選序言」(『当代女作家小説選』大平書局　一九四四年)。「序言」の「二」の部分が「論蘇青及張愛玲」と題され、『風雨談』第十六期(一九四四年)に掲載された。

(3) 同時代のものとしては、實斎「記蘇青」(『雑誌』一九四四年四月号)、譚正璧前掲書。近年では、戴錦華編『浮出歴史地表』(河南人民出版社　一九八九年)、劉思謙『〝娜拉〟言説』(上海文芸出版社　一九九三年)、胡凌芝「論蘇青」(『中国現代文学研究叢刊』一九九三年一期)など。日本においては、濱田麻矢「女性作家による淪陥期上海の日常と矛盾――張愛玲と蘇青をめぐって――」(『野草』第五二号　一九九三年)、櫻庭ゆみ子「蘇青論序説――『結婚十年』が書かれるまで――」(『東洋文化研究所紀要』第百二十九冊　一九九六年)

(4) 譚正璧前掲書

(5) 張愛玲「我看蘇青」(『天地』第一九期　一九四五年)

(6) 「女作家聚談」(『雑誌』十三巻一期　四四年四月。座談会は、同年三月十六日、新中国報社社屋にて開かれた。)

(7) 戴錦華編『浮出歴史地表』(河南人民出版社　一九八九年)

(8) 蔚明「一個女作家的沈浮」(『随筆』一九九五年五期)